

金曜 ライフ・楽しむ

シニア世代を応援するページです

突然のスピーチ 楽しむ備えを

わたし色

生活情報誌「悠悠と。」

編集長・真鍋康利さん



子どもが幼稚園の頃、父親参観にいきました。親子で竹ひご飛行機を作り、それを飛ばすのですが、一生懸命作ったので、幸い最も遠くまで飛ばすことができました。息子は満面の笑みで「ヤッターヤッター」と喜んでいきます。

教室に紙芝居の用意がしてあり、先生が「さつき一番飛ばしたのは真鍋君でしたなね。それではお父さん、前に出て紙芝居を読んでください」とのお達し。逆罰ゲームのような感じですが、息子はもちろん子どもたちが皆ワクワクしているのが分かります。家で

もやったことがあります、まあいいかと、情緒たっぷりに読み上げ、大いにうけました。一息ついたとき先生は、「では2番目に遠くまで飛ばした〇〇君のお父さんに続きをお願いします」と、私よりずっと若いお父さんを指名しました。ところが彼はとっさに「俺はやらない」とひと言発し、前に行く様子はありません。教室内がシーンとなった後、その子は泣き出してしまいました。まだ若い先生もオロオロしています。副園長が紙芝居の残りを読みましたが、ちよつと複雑な空気に包まれました。

人前で話すというのはなか



なか大変なことです。彼には過去にそんな機会がなく、心の準備ができていなかったのでしょう。私は得意かというところでもなく、彼より年長で、いくらかそんな機会があったからに過ぎません。以前勤めた会社の朝礼でこの話をし、若い部下たちにも分間スピーチをさせたことがあります。最初は中身もなく、何を言っているか分からないスピーチでしたが、何回か続けると面白く聞けるようになりました。何事も訓練なのだと感じたものです。



事前に聞かされていない中で、あいさつなど突然振られ

ることがあります。そんな時、うろたえるのは嫌なので、「もしものときはこう話そう」と一応、簡単な備えをするようにしています。うまくやめようと言よりは「恥ずかしい思いをしたくない」というのが本音です。

結婚式をはじめ、いろいろな会で何回かそんなことがあり、準備するのが当たり前になりました。もちろん空振りもあります、無駄とは思いません。備えがあることで心にゆとりができ、その時間と空間を存分に楽しむことができます。

とは言いながら、最近あまり上手に話せなくなりました。あいつはオモロイことを言うぞ、との期待をひしひしと感じるがゆえに笑いを取ろうとして空回りすることが増えたのです。年齢とともに頭の回転も口周りの筋肉もへたってきたのでしょうか。